視覚障害者の日常生活ストレスに対する 個人的規定要因の検討¹

関西学院大学 松中久美子^{2,3}

An investigation of personal factors on daily stress of people with visually impairment

Kumiko Matsunaka (Department of Psychology, School of Humanities, Kwansei Gakuin University, Uegahara, Nishinomiya 662-8501)

In study 1, the test-retest reliability and concurrent validity of Stress Check List for the Visually Impaired (SCLVI) were investigated. Results demonstrated high reliability and validity. In study 2, multiple regression analysis was performed to examine the effects of personal factors on daily stress measured by SCLVI in 144 people with visually impairment. The predictors were: sex, age, age their eyesights were impaired, and whether or not the subjects have family members to live with; the dependent variables were 3 stress subscales. Results showed that "disturbing and conflicting stress" was lower among the older than among the younger visually impaired people. The visually impaired with higher eyesight levels felt higher stress in their interactions with people with normal eyesight. It was concluded that age and sight level among personal factors affect daily stress of visually impaired people significantly.

Key words: daily stress, visual impairment, test-retest reliability, concurrent validity, personal factors.

Carroll (1961) は視覚障害によって生ずる制限を“20の喪失”としてまとめ解説している。その“20の喪失”は、“心理的安定に関する基本的な喪失”、“基礎的技術の喪失”、“意志伝達能力の喪失”、“鑑賞力の喪失”、“職業、経済的安定の喪失”、“結果的に全人格に生ずる喪失”の6群にまとめられている。これらの喪失すべてに共通し、その根本にあるのは視覚的情報源の喪失である。それは、“視覚優位”であるといわれるヒトの生活のさまざまな状況において情報入手の制約、すなわち“情報障害”をもたらしている。それは単に社会的情報の入手が困難であるということだけでなく、周囲の状況把握が的確にできないためにそのことが行動に影響するということも含まれる（愼, 1997）。例えば対人場面において、視覚的情報の喪失は相手の表情をみることができないといった社会的不利をもたらす。日常生活においては、このような状況が数限りなく存在し、多大な心理的ストレスをもたらすと予測される。

そこで松中（1997）は約100名の視覚障害者に対する個人面接の結果をもとに、全24項目からなる視覚障害者用日常ストレスチェックリスト（Stress Check List for the Visually Impaired People; 以下SCLVIと略す）を作成し、“外出・援助依頼状況”、“矛盾的・妨害的状況”、“対晴眼者状況”の3因子を抽出した（Table 1）。このチェックリストの各下位尺度の等質性、および下位尺度の弁別的妥当性はいずれも高いことがすでに確認されている（松中, 1997）。しかし、尺度の信頼性や併存的妥当性についてはこれまでに検討されていない。

一方、視覚障害者のストレスに関するこれまでの研究の多くは、老人や特定の疾病をもつ場合（Jacobs, VanZandt, & Stinnett, 1983; Burack-Weiss, 1991）、歩行時のストレス（Seybold, 1993; Beggs, 1991）のように、特定の対象者や特定の状況に限定されている。したがって、調査時の年齢や受障時期の影響について十分に検討されたものはほとんどないと言える。

ストレスの性差については夏目・野田・乾（1997）が勤労者、大学生、主婦を対象として調査を行っている。その結果、いずれの対象群においても女性は男性に比べてストレス度が高い傾向にあるという結果を得ている。人は視覚に障害をもつことによって直ちに、視覚障害者特有の性格をもつようになるのではなく、視覚障害者特有のストレスフルな状況が生じるだけで

¹ 本論文の一部は日本心理学会第63回大会で発表された。

² 本調査にご協力くださった視覚障害者の皆様に心より感謝いたします。

³ 本論文の作成にあたり貴重なご助言をいただきました関西学院大学文学部今田寛教授、嶋崎恒雄助教授に心より感謝申し上げます。

Table 1

調査に用いられたストレスチェックリスト (SCLVI) の
質問項目

No	質問項目 (3 下位尺度の合計得点: 24—120)
外出・援助依頼状況 (得点範囲: 10—50)	
24	一人で買い物へ行かなければならない時
3	慣れないところへ一人で外出しなければならない時
6	知らない店へ一人で行く時
11	歩行訓練を受けていない地域で外出する時
19	一人で外出中に、トイレへ行きたくなった時
8	道に迷った時
1	外を歩くのに人に助けを求めなければならない時
4	雨の日に外を歩かなければならない時
21	遠出をする時
2	電車の切符を買う時
矛盾的・妨害的状況 (得点範囲: 10—50)	
9	友人におせっかいをやかれた時
7	自分に出来ることをすると言われ、家族に甘やかされていると思った時
20	人が自分のことを見かけで判断した時
10	間違った道順を教えられた時
5	自分のことをじろと見られている気がする時
15	家族にしつこく悩みを聞かれる時
22	自分にわかっていないことを、わかったふりをしてしまった時
13	日常生活において何をどこまで人に頼んでよいかわからない時
23	相手を悩ませてはいけないと思って、人に相談できない時
16	洋服の買い物をする時、店員の説明がわかりにくい時
対晴眼者状況 (得点範囲: 4—20)	
17	白杖を持っているところを近所の人に見られた時
18	晴眼者が多い集まりに行く時
12	晴眼者と一緒に買い物へ行く時
14	自分の視力のことを知らない人と話をする時

ある。したがって、本研究の対象者においても、夏目他 (1997) の研究と同様に男性よりも女性の方がストレス度が高いことが予測される。

一方、視覚は“対象を見る”という基本的機能とともに、他の感覚機能や個人の学習・経験などと相互に作用しあって、相互感覚的な特性をもっている” (関, 1994, p. 100)。その学習や経験に対して、性別、年齢、視力などの個人的特性が何らかの影響を与えることは十分に予測されることである。もし、その視覚に障害を受ければ、その基本的機能を喪失するだけであ

く、視覚を利用したそれまでの学習や経験の成果は利用できない状態になる。したがって、同年齢の中でも受障時の年齢が低い人ほど視覚障害者としての経験は豊富となり、学習の経験がより多くなる。つまり、日常ストレスは調査時の年齢によって一律に規定されるのではなく、受障時年齢が低いほど日常ストレスは低くなると予測される。

また、視力に関連して、弱視者の見え方における個人差の問題がある。単独歩行であれば視覚情報が利用できることは明らかに有利に働くが、対晴眼者場面においては逆の効果をもたらす可能性も考えられる。この点に関して津田 (1997) は視覚障害者を対象として職場定着に関する調査を行った。その中で、弱視者における職場の人間関係の難しさに言及している。特に事務職の場合、“職場で視覚障害者は理解されていない”と回答した割合 (40.5%) は“理解されている”と回答した割合 (24.3%) を大きく上回っていた。津田 (1997) は、事務職の場合、すみ字使用者の割合が高く本人の見え方について周囲の理解が得にくい可能性があるとして述べている。さらには、同一個人内においても周囲の状況や明暗の方向などによって、本人の見え方が異なる場合がある。したがって、ある状況では“よく見える”と判断されても、別の状況においては“よく見えない”こともあり、職業生活においては“怠けている”と評価されることもある (手塚, 1981)。したがって、視力は本調査で用いられたストレスチェックリストのうち“対晴眼者状況”ストレスに影響し、全盲者より弱視者の方が高いストレスを感じると予測される。

最後に同居家族についてであるが、最も身近で日常的に得やすいサポートとして、その存在は重要である。同居家族がいることで視覚障害者の日常ストレスは緩和され、家族が同居していない場合に比べてストレス度は低くなると予測される。

以上の点をふまえ本研究ではこれまでに検討されていない SCLVI の尺度の信頼性と併存的妥当性について検討し (調査 1)、その後、視覚障害者のもつ個人的要因、すなわち性別、年齢、受障時期、視力、同居家族の有無が日常的ストレスに及ぼす影響について検討する (調査 2)。

調 査 1

目 的

松中 (1997) においては検討されなかった SCLVI の信頼性と併存的妥当性について検討することを目的とする。信頼性については再検査法と折半法を用い、併存的妥当性については状態・特性不安尺度 (State-Trait Anxiety Inventory: 以下 STAI と略す) の日本語版 (岸本・寺崎, 1986) との相関係数を求めた。本研

究の測定対象となっているストレスは、一般成人の日常ストレスとは大きく異なる。後天性の場合はその個人の特性として障害が新たに加わり一種の慢性的なストレス源となる。その影響は障害者本人にも予測できないことが多く、それによってかなりの不安が引き起こされる。先天性においては、はじめから個人の特性として存在しているが、社会的環境においては晴眼者と比較すればより多くの負担がその個人に課せられる。盲学校のような視覚障害者にとって守られた環境においては予測されない困難な状況が一般社会には多く存在し、卒業後には新たな不安が引き起こされると考えられる。したがって、特性不安が高い人ほど日常ストレスも高いと予測され、STAI-IIを用いることとした。

なお、岸本・寺崎（1986）は日本語版 STAI の信頼性について男女別に α 係数を算出しており、0.86—0.89 の高い内的整合が得られている。また、特性不安を示す STAI-II の妥当性については MAS との相関係数が男女それぞれ、0.733 と 0.719 となっており、併存的妥当性が確認されている。

方 法

調査対象者 視覚のみに障害をもつ男女 49 名（平均年齢 42.08 歳、18—81 歳）を調査対象とした。そのうち、45 名が再検査法に参加した。対象者のうち約半数は日常生活訓練を受講中の訓練生であり、残り半数は視覚障害者を対象とした居住地域での行事に参加した人であった。

1 回目と 2 回目の間隔は約 1 か月であった。また、1 回目の対象者 49 名に対しては同時に STAI-II を施行し特性不安を測定した。49 名のうち男性は 26 名、女性は 23 名であり、受障時期については先天性（3 歳までに受障）が 6 名、後天性が 43 名であった。また、両眼のうち視覚の程度が高い方の眼について、その範囲は全盲から 0.3 であった。

質問紙 1. SCLVI（松中、1997、Table 1）：全 24 項目に対して、ストレスを感じる度合を“全くストレスを感じない（1 点）”から“非常にストレスを感じる（5 点）”までの 5 件法で評定させた。松中（1997）で得られた 3 因子を下位尺度とし、各尺度に含まれる質問項目に対する評定値の合計を、各下位尺度の得点とした。第一の下位尺度は“外出・援助依頼状況”であり、“慣れないところへ一人で外出しなければならない時”のような項目が 10 項目含まれている。つまり、援助依頼が必要な場合を含む、外出時のストレスフルな状況を表している。第二の下位尺度は“矛盾的・妨害的状況”を表し、“友人におせっかいをやかれた時”や“自分にわかっていないことを、わかったふりをしてしまった時”のように他者と自分、あるいは自己の内面における葛藤を表した状況が 10 項

Table 2
SCLVI と STAI における平均得点、標準偏差、
信頼性係数、相関係数（ $n=49$ ）

	平均値	信頼性係数		STAI-II との 相関係数
		再テスト法 ^{a)}	折半法	
総得点	77.32 (17.37) ^{a)}	0.85	—	.445**
下位尺度				
外出・援助依頼	33.53 (8.29)	0.79	0.86	.315*
矛盾的・妨害的	34.35 (7.64)	0.87	0.81	.433**
対晴眼者	9.45 (4.10)	0.79	0.75	.438**
STAI-II	48.35 (11.49)			

* $p < .05$, ** $p < .01$.

^{a)} かつこ内は標準偏差。

^{b)} 再テスト法のみ $n=45$ 。

目含まれている。第三の下位尺度は“対晴眼者状況”であり、“晴眼者が多い集まりに行く時”を含む 4 項目から構成されていた。各下位尺度の得点範囲は Table 1 に示されている。

2. STAI-II（岸本・寺崎、1986）：このテストは特性不安を測定し、20 項目からなる。回答には“ほとんどない（1 点）”から“いつもある（5 点）”までの 4 件法を用いた。

3. フェイスシート：性別、年齢、受障時の年齢、視力、同居家族の有無についてたずねた。

手続き 1 回目は 1998 年 2 月にストレスチェックリストと STAI による調査、2 回目は同年 3 月にストレスチェックリストのみによる調査がそれぞれ行われた。質問項目はすべてカセットテープに録音され、音声によって質問項目を提示した。調査はいずれも集団で対面によって行われた。集団の人数は数名から 10 数名であった。

回答方法は、“ペンで記入”、“点字で記入”、“指で示す”の中から各対象者が自由に選択した。

結果と考察

SCLVI の信頼性について Table 2 に STAI および SCLVI の各下位尺度の平均得点、標準偏差、再テスト法と折半法による信頼性係数を示した。再テスト法の結果はピアソンの積率相関係数で示され、折半法はスピアマン-ブラウンの公式により修正された係数を示してある。信頼性係数は、いずれも 0.7 以上の値

Table 3
対象者の属性

		男性 (n=84)		女性 (n=60)		全体 (n=144)	
		人数	%	人数	%	人数	%
調査時年齢	10代	4	(4.76)	5	(8.33)	9	(6.25)
	20代	20	(23.81)	34	(56.67)	54	(37.50)
	30代	11	(13.09)	4	(6.67)	15	(10.42)
	40代	19	(22.62)	6	(10.00)	25	(17.36)
	50代	13	(15.48)	6	(10.00)	19	(13.19)
	60代	17	(20.24)	5	(8.33)	22	(15.28)
受障時期	先天	12	(14.29)	29	(48.33)	41	(28.47)
	後天	72	(85.71)	31	(51.67)	103	(71.53)
視力	全盲	18	(21.43)	15	(25.00)	33	(22.91)
	光覚	25	(29.76)	17	(28.33)	42	(29.17)
	0.01—	11	(13.10)	7	(11.67)	18	(29.17)
	0.02—	30	(35.71)	21	(35.00)	51	(35.42)
同居家族	あり	67	(79.76)	52	(86.67)	119	(82.64)
	なし	17	(20.24)	8	(13.33)	25	(17.36)

を示しており、尺度の信頼性が確認された。

SCLVIの妥当性について 各下位尺度の平均得点と3下位尺度の合計得点それぞれについて、STAIとの相関係数を求めた (Table 2)。その結果、併存的妥当性としてはやや低い0.32—0.42の範囲ではあるが、いずれも有意な相関係数を示しており、特性不安が高いほど日常ストレスも高いという予測どおりの結果が得られた。

調 査 2

目 的

調査2では、視覚障害者の性別、年齢、受障時期、視力、同居家族の有無が日常生活におけるストレスにどのように影響するのかを検討することを目的とする。

方 法

調査対象者 対象者の属性とその人数の分布をTable 3に示した。視覚のみに障害をもつ男女144名 (男性84名、女性60名) を対象とし、年齢は18歳から60歳代までであった。また、いずれも日常生活訓練または職業訓練を受講している訓練生であった。全対象者のうち、先天性 (生後3歳までに受障) は41名、後天性は103名であり、また、視力は、全盲から良い方の眼が0.4までの範囲であった。

質問紙 STAI-IIを除いて調査1と同じもの、すなわちSCLVI (松中, 1997)、およびフェイスシートを

Table 4
男女別の平均ストレス得点と標準偏差

	性別	
	男性 (n=84)	女性 (n=60)
総得点	80.02 (15.81)	84.78 (13.24)
下位尺度		
外出・	34.11	35.40
援助依頼	(8.37)	(7.81)
矛盾的・	34.82	37.93
妨害的	(7.25)	(6.55)
対晴眼者	11.08	11.45
	(3.86)	(3.73)

用いた。

手続き 各対象者が1回のみ調査に参加したことを除いては、調査1とほぼ同様の手続きにより集団で行った。

結果と考察

各ストレス得点の分布は、いずれもほぼ正規分布を示していたので、以下の統計的分析においてはすべてパラメトリックな方法を用いることとした。

性別による影響 Table 4に全体および男女別の平均ストレス得点と標準偏差を示す。数値の単純な比較では24項目の合計得点である総得点および“矛盾

Table 5
ストレス得点を従属変数とした重回帰分析 ($n=144$)

	標準偏回帰係数		
	外出・援助依頼	矛盾的・妨害的	対晴眼者
性別	.09	.11	.10
年齢	.02	-.20*	.04
視力	-.06	.03	.27**
家族の有無	-.17	-.13	-.07
受障時期	-.01	-.16	.08
R^2	.04	.13**	.10*

** $p < .01$, * $p < .05$.

的・妨害的状況”得点において、男性に比べて女性の方が比較的高いストレス度を示している。この結果は夏目他（1997）の結果と一致しており、性差について視覚障害者と晴眼者とは同じ傾向をもつことを示している。

性別・年齢・視力・家族の有無・受障時期による影響 三つの日常的状況におけるストレス度に対して対象者の個人特性が与える影響について調べるため、性別・年齢・視力・家族の有無・視覚障害の受障時期を独立変数として重回帰分析を行った（Table 5）。受障時期は生後3歳までに受障したものを先天性とし、3歳以降に受障したものを後天性とした。その結果、“矛盾的・妨害的状況”ストレスに対しては年齢が影響し、“対晴眼者状況”ストレスに対しては視力が影響していることが示された。すなわち、“矛盾的・妨害的状況”ストレスは加齢とともに低くなり、“対晴眼者状況”ストレスは視力が高い人ほど高いことが明らかとなった。

加齢による影響について、下仲（1988）は65歳から99歳までの老人を対象とし、自己概念の発達に年齢とともに直線的に肯定的に発達していくと結論している。本研究の対象者は下仲（1988）の対象者とは障害の有無の点で異なるが、それは単に対象者の特性の一部であり、加齢とともに自己概念が発達するという基本的な部分はどちらの対象者にも共通しているといえる。また、本研究の対象者の最高年齢は60歳であり、発達のには老年期に差しかかった時期である。いわゆる自己概念の発達とともに、障害に関連した困難な状況に対する対処方法も次第に学習されていくであろう。そうすれば、障害を含めた自己をより受容しやすくなり、その結果として“矛盾的・妨害的状況”ストレスが低下するのではないかと考えられる。

視力による“対晴眼者状況”ストレスへの影響は、先に述べた津田（1997）の結果と一致するものであり、視覚的情報をもつことによって“対晴眼者状況”ストレスは低減されず、むしろ高くなることを示して

いる。その理由としては、晴眼者と全く同じものではないがいくらかの視覚情報をもつことが、職場環境に限らず日常生活においても、相互理解を困難にしているためではないかと考えられる。同じ視覚情報を共有することができないという点においては、全盲者も弱視者も同じである。しかし、弱視者の見え方には個人差があり、そのことが対晴眼者状況をより複雑なものにしている可能性がある。

最後に、外出・援助依頼状況ストレスに対して、本研究で取り上げた個人的要因はほとんど影響しないことが示された。むしろ、援助依頼を含めた歩行技術の個人差やそのような状況におけるソーシャル・サポートの存在がより大きな影響を及ぼすのではないかと考えられる。また、本調査の対象者はいずれも生活・職業技術の訓練中であり、ストレスフルな状況が必要最低限に抑えられるよう、常に手引き者を同伴するなどの対処をしていた可能性がある。いずれにしても、このような状況におけるストレスに関しては、歩行・外出に必要な技術をすでに習得した対象者について再度検討することが必要である。また、本研究では家族の有無による影響は認められなかったが、家族以外のソーシャル・サポートによるストレス軽減効果についても検討することが今後の課題である。

引用文献

- Beggs, W.A. 1991 Psychological correlates of walking speed in the visually impaired. *Ergonomics*, **34**, 91-102.
- Burack-Weiss, A. 1991 In their own words: Elders' reaction to vision loss. *Journal of Gerontological Social Work*, **17**, 15-23.
- Carroll, I.J. 1961 *Blindness, what it is, what it does, and how to live with it*. Boston: Little Brown and Company.
- Jacobs, P.L., VanZandt, S., & Stinnett, N. 1983 Working towards independence for the elderly visually impaired. *Physical and Occupational Therapy in Geriatrics*, **2**, 39-53.
- 岸本陽一・寺崎正治 1986 日本語版 State-Trait Anxiety Inventory (STAI) の作成 近畿大学教養部研究紀要, **17**, 1-14.
- (Kishimoto, Y., & Terasaki, M. 1986 The development of Japanese version of State-Trait Anxiety Inventory (STAI). *Research Bulletin of Faculty of Liberal Arts of Kinki University*, **17**, 1-14.)
- 松中久美子 1997 視覚障害者日常ストレスチェックリストの作成 関西学院大学人文論究, **47**, 159-168.
- (Matsunaka, K. 1997 The development of check list of daily stressor for visually impaired people. *The Journal of the Literary Association of Kwansei Gakuin University*, **47**, 159-168.)

- 夏目 誠・野田哲郎・乾 正 1997 ストレス調査と
ケースからみた性差異について ストレス科学,
12, 42-47.
(Natsume, M., Noda, T., & Inui, M.)
- 関 宏之 1994 障害者問題の認識とアプローチ 中
央法規
(Seki, H.)
- Seybold, D. 1993 Investigating stress associated with
mobility training through consumer discussion
groups. *Journal of Visual Impairment and Blind-*
ness, 87, 111-112.
- 下仲順子 1988 老人と人格 川島書店
- (Shimonaka, Y.)
- 愼 英弘 1997 視覚障害者に接するヒント 開放出
版社
(Shin, Y.)
- 手塚直樹 1981 障害者福祉論 光生館
(Tezuka N.)
- 津田 諭 1997 視覚障害者の職場定着に関するアン
ケート調査結果の概要 視覚障害リハビリテーショ
ン, 46, 57-79.
(Tsuda, S.)
- 2000. 3. 22 受稿, 2002. 3. 2 受理——